

論文の内容の要旨

論文題目 中国旧小説カノン形成における文学史観のはたらき——民国時期における
旧白話小説評価の実態

氏名 大 橋 義 武

中国において「小説」は、20 世紀に入ってから文学の中心に据えられた。この近代における小説観の転換の重要さは従来よく指摘されてきたが、その際に近代以前の作品（旧小説）がどう扱われたのかについてはこれまで研究が少なかった。現在では中国文学の古典として愛好や学習の対象となっている『水滸伝』『紅樓夢』などは、いったいどのようにしてそのような扱いを受けるに至ったのか。本論は、これまで見過ごされがちであった「新しい文学の時代の中における旧文学のあり方」について問い直しを試みた。

「小説の地位の変化」自体が問題となるため、本論は旧白話小説に関わる先行研究（受容史研究及び学術史研究）の貢献と限界を踏まえ、いわゆる「文学カノン形成」の議論を参考とした。主たる検討対象は旧白話小説（『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『紅樓夢』等）とし、主に 20 世紀前半においてそれらを論じた言説を、文芸批評・教科書・文学史の分野を中心にまとめる。各分野において何がどう語られたかを整理し、旧白話小説の実態を明らかにすることを目指した。

第 1 章では、「文学革命」における小説評価の発端として、『新青年』誌上での胡適・陳独秀・錢玄同の間の討論を分析した。旧白話小説は当初こそ守旧的な伝統文学と一線を画するものとして高く評価されたものの、討論が深まるにつれ文芸的未熟さや思想的古さが

その想定される読者との関係で問題視され、最終的にはその価値は専ら「白話」の用い方に認められることとなった。結論こそこのように消極的だが、旧白話小説を歴史的に捉える視点を提示し、同時代の小説読者を意識した議論を展開したこの討論は、続く時代の小説論の先駆けをなすものであった。

旧白話小説に認められる価値が専ら「白話」の一点に集中したことは、まず同時代の国語教育との関係で意味をもった。胡適や何仲英らの積極的提唱もあり、旧白話小説のうち一部の作品が学校教育へ取り入れられることとなる。梁啓超などこの動きに反対する者もいたが、1920年代半ば以降は教科書への採用も広がっていった。特に歓迎されたのは、『儒林外史』の「王冕」や『鏡花縁』の「女兒国」といった、当時の価値観（「反礼教」「反封建」）に合う部分や、傑出した場面描写で定評のあった『水滸伝』の「景陽崗」などであった。このように教育的関心に基づく評価軸が立てられ、旧白話小説の命運を支える流れの一つが生まれたことを第2章では明らかにした。

第3章では1920年代の新文学者たちの議論に注目する。当初は、周作人「人的文学」が『水滸伝』『西遊記』などを名指しで『人の文学』ではないものとしたように、作品の内容即ち旧時代の思想を問題視する意見が主であった。時代が下ると、茅盾らによって旧白話小説の形式や文学技術の欠陥も指摘されるようになる。こうして旧白話小説は、近代的文芸とは異質なものとされ新文学との接点を失っていく。この時期求められた「小説」とは「人生を描写」することを主とする「写實的ノヴェル」であって、これを基準とすると旧白話小説はその資格を欠くとされたのである。また小説に社会的な効用を求める意識も根強く、このことも「遊戯的」と見られた旧小説を否定する判断につながった。このように新文学との関係で見ると、旧白話小説は文学カノンとしての地位を確立したといえる状況にはなかった。

ここまでで見てきたポイントは、文学における新旧対比の意識や、小説へ効用を求める意識が旧小説の評価に影響していたということである。振り返ってみると、そういった新旧の意識や効用論は、すでに清末には要素として出てきていた。第4章では特に旧小説についての議論に注目しつつ清末の小説論を振り返る。まず梁啓超らの「小説界革命」は小説のもつ感染力・有用性を強調しその地位向上をもたらしたが、それは旧小説について悪影響の源として否定する論理と一体であった。この時期、『新小説』誌の「小説叢話」欄などに旧小説作品を評価する言説が登場したり、王国維によって『紅樓夢』が本格的に論じられたりといったことはあったが、それらはあくまで例外であった。清末の主流的小説論は「小説」をジャンルとして認識し始めた点で画期的であったが、あくまで「旧」との断絶を強調することによって「新」しい文学を打ち立てようとする意識が勝り、積極的に「中国の小説」全体を捉えようとする意志は強くなかった。

「小説」を「中国文学」の中へ取り入れる作業は、「文学革命」を経て新たな文学観を受け入れた文学史家（魯迅・鄭振鐸他）によって、1920年代以降の文学史研究の場で進められている。「文学史」というこの新しい学術分野と小説の関わりについて、第5章でまとめた。「中国文学」の重要な構成要素として「中国小説」を位置付ける動きは教育の制度面と

も連動しており、小説を取り上げる多くの文学史著作が出るようになるとともに各大学においても小説を扱う科目が登場し増加した。当時の大学課程を調べていくと、「中国小説が古代より存在したこと」や「それが歴史的変遷を経ること」が 30 年代半ばには前提としてほぼ共有されるに至っていたことがわかる。そしてこの「中国文学史のなかの中国小説」の規定の仕方が、胡適と魯迅の思想に影響されていることも見えてきた。

そこで第 6 章では魯迅の著作と思想に目を向けた。魯迅は『中国小説史略』という通史を著し、神話・寓話から伝奇・白話章回小説までを歴史的一体性を有する「中国小説」としてまとめた。その上で彼は歴史上の実例に即して、「描写」や「想像力」の重要性を説き、「模倣」や「教訓」の蔓延を批判するなど、小説のあるべき姿について指摘している。魯迅は、中国における小説が「非正統」のものであったことを逆に積極的に捉え、従来の「正統文学」からは得難かった作者の精神を汲もうとしたのであった。

そういう魯迅の見解が具体的作品評価の面でもった特徴・意義について明らかにするために、次に他の文学史著作の記述との比較対照を行った。その結果、『儒林外史』が文章と思想に優れる「諷刺小説」としての地位を固め、『金瓶梅』が写実的な文芸としての評価を得ることになったのは、魯迅の見解に負うところが大きかったことが確認された。一方で『紅樓夢』についての魯迅の評語などは、ほとんど周囲・後続への影響となってはあらわれていない。このように個別作品への評価においては先駆的研究が他に影響を及ぼす場合もそうでない場合もあり、少なくとも「文学カノン」が容易に確立するものではなかった事実も明らかとなった。

第 7 章で扱う胡適もまた旧白話小説の地位向上に広く関与している。アメリカ留学中に「白話文学＝進化する活文学」との図式を得た彼は、歴史上の進化の実例として旧白話小説を大いに評価した。彼は文学言語のわかりやすさを重要視する立場から、過去の白話小説に現在の文学へ接続するものを見出そうとした。この白話文学史観は、新文学との断絶を前提とした多くの論者の発想とは異なり、旧白話小説を積極的に評価するロジックとなった。

個別作品に関して胡は小説考証を残しているが、同時代の文学史著作との比較対照によれば、胡適の見解のうち特に後続に具体的に影響があったのは『西遊記』と『鏡花縁』に関するものである。前者については「想像力」と「脱教理的な読み」の大切さを説いて、『西遊記』を諧謔の味わいを有する文芸作品として認め、後者においては「女兒国」の部分を中心に「婦人問題」など社会の問題を論じた書との評価を定着させた。もっとも彼は、旧白話小説の現代的意義を示そうとはしたが、個々の小説作品の価値を十分に具体的に発掘・評価したわけではなかった。例えば『水滸伝』を白話文学史上の画期的作品とはするものの、内容に関連した具体的価値は提示していない。この件が象徴するように、彼は旧白話小説が「活きた文学」として優れることは熱心に語るが、その「人の文学」としての資格・価値については説得的に語る事がなかった。文学論の面でのこの弱点から、彼の考え方の拡がりは一面的なものにとどまっている。

以上のように 20 世紀前半における旧白話小説に関係する諸言説を整理してみて、中国近

代におけるその命運は文学史観と密接に関わるものであったことがわかった。旧小説の評価は、中国文学の歴史の中にそれをどう位置付けようとするかにかかるものだが、新しい文学としての「小説」を打ち立てようとする意識からすると、西洋由来の近代小説（写實的ノヴェル）の概念に適合しない旧小説は受け入れ難く、しばしば否定的な価値判断を含む取捨選択が行われた。王国維の『紅樓夢』評論などが「文学史の例外」とみなすことにより当該作品の魅力を語り得たのとは対照的に、それを「文学史」に回収しようとする際の作法によって、却って作品の評価が型にはまったものになってしまった面があった。

そして現代の中国文学史著作においても中国旧小説の「写實的ノヴェル化」を「発展」とみなす文学史観が存在し続けていることからわかる通り、「実」が「奇」を圧倒する——「ノヴェル」を採り「ロマンス」を排す——ような小説観によって、「中国の小説」は捉えられてきている。本論は旧白話小説評価の実態を明らかにしたわけだが、それは「文学史」のはたらきを要とする中国近代の「文学」のあり方と大きく関わっているということがあらためて見えてくることとなった。